

# じやりみち

……被災地支援情報……

第95号 発行日 2011.8.18

被災地 NGO 協働センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通 2-1-10

TEL : 078-574-0701 FAX : 078-574-0702

E-mail : ngo@pure.ne.jp

http://www.pure.ne.jp/~ngo/

## 人を救うのは人だ！！

17 回目の「1・17」を終え、年度末に向けて諸手続に追われていた3月11日、M9.0という近年では体験したことのない大きな地震が発生した。北は青森県から南は千葉県までの広範囲に被害をもたらした。この地震は大津波を併発したために、約500kmに及ぶ太平洋沿岸地域のほとんどが壊滅的被害を受けた。さらにこの地震津波によって東京電力福島第一原子力発電所では、メルトダウン、メルトスルー、水素爆発などと次々と事故が発生し、“第2のチェルノブイリ”さながらの深刻な事態を招き、明確な解決策が見えないまま現在に至っている。

さて、私たちは16年前の阪神淡路大震災によって、尊いいのちを失い、多くのかげがえのないものを失ってきた。その一方で「人間は一人では生きていけない」「一人ひとりを大切にしなければならない」「最後のひとりまでを救おう」などと、大切なことも体感してきた。特に、「人を救うのは人だ！」というごくあたり前のことにも気づいた。

しかし、“未曾有”と言われる東日本大震災発生から3ヶ月が過ぎたが、被災者の暮らし再建の道筋は見えない。たとえば避難所生活において、未だに「朝は菓子パン、夜はお弁当」という生活が続いている。被災地に行くと「東北の人はほんとうに我慢強い！」とよく聞かすが、我慢にも限界があるというのはこのことだ。発災直後に毛布がないため亡くなったという信じられない事態があった。このまま行くと、餓死者が出るのではと心配にもなる。

一方、今急ピッチで仮設住宅の建設が進み、避難所から仮設住宅への移行も始まっている。また住まいは残ったが、床下・床上に海水と泥が入り、災害前の生活に戻れない人も多い。これからは、こうした多彩な被災者がいることに私たちがもっとも目配りをしなければならない。特に避難所とは違って仮設住宅といわれる閉ざされた一軒一軒の家に入ると、被災者自身からSOSがなければ「人を救うことはできない」ということである。「一人ひとりの被災者に、マンツーマンあ

るいは複数でサポートする体制をいち早く築かなければならない」ということだ。

**農業・水産業の再建、仕事づくりと急がなければならない課題は山積している。**ゆめ風基金は、「避難生活で困っていませんか？何でも相談ください」と被災地を走り回っている障害者団体をサポートしている。また高齢者や貧困者を対象に、被災地全域で虫の目でサポートしようとかけずり回っているNPOもある。やはり「人を救うのは人だ！」という16年前の学びは原点である。

**私たち被災地 NGO 協働センターは、いまここの16年間で培ってきた経験や学びを活かし、可能な限り東日本の被災者支援に役立てなければならない。**そのためには、私たちにできることは何でもするという決意である。

**最後に原発事故の影響で避難を余儀なくされた被災者に対しては、かなりの長期にわたることを想定して、支援を継続しなければならないと考えている。**深刻な事態を招いた原発事故と向き合い続ける中で、明確に脱原発を宣言し、再生可能なエネルギーに代えていく道筋を築くために私たちのライフスタイルを見直すことも誓いたい。「ノーモア ヒロシマ」「ノーモア ナガサキ」「ノーモア 水俣」などに続いて、「ノーモア フクシマ」と叫ばなければならないとは、あまりにも悔しく、無念なことであるが、あきらめないで叫び続けたい。



2011年6月28日

代表 村井雅清



# 2011年度被災地NGO協働センター 総会報告

～2011年6月28日 当センター会議室にて開催～

## <2010年度事業報告>

### 1. 寺子屋事業

2000年より始まった寺子屋セミナーの10周年企画として、「減災サイクル」を2シリーズ開催。

#### ・第1シリーズ

第1回(9/15)「減災サイクル総論/もうひとつの社会」  
講師：渥美公秀

第2回(10/27)「応急対応」講師：黒田裕子

第3回(11/29)「復旧・復興」講師：村井雅清

第4回(12/15)「事前の備え」講師：橋高千秋

#### ・第2シリーズ

第1回(1/18)「事前の備え」講師：村野淳子

第2回(2/18)「復旧・復興」講師：永松伸吾

第3回(3/18)「もうひとつの社会」震災のため中止

・特別編(5/29)「鈴木隆太さんから若者へのメッセージ」

### 2. まけないぞう事業

1997年から始まった本事業。東日本大震災の被災地でも「まけないぞう」づくりが始まり、被災者に喜びと希望を運んでいる。(詳細後述)

・実績：1,245頭出荷、166頭寄贈

### 3. 災害救援事業

3月11日に発生した東日本大震災に対する支援活動の詳細は後述。

当センターが事務局を務める「足湯ボランティア活動」は、主に能登半島(2007年地震発生)・兵庫県佐用町(2009年水害発生)などの地震や水害の被災地を延べ35日間訪問し、活動を実施。ミーティングを毎月開催し、メンバーも増えて広がりを見せている。

佐用町の復興支援としては、水害の遠因ともなった竹林の整備の一つとして竹炭づくりを継続して実施(現地訪問延べ76日間)。水害被害の拡大を招いた山林整備の活動も開始することになった。

また、静岡県で開催している(2010年で6年目)「東海地震などを想定した広域連携図上訓練」のリーダー的役割として今年度も参画した。

### 4. 提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

2010年度は、47ヶ所のセミナー・シンポジウム等に出席し、提言・ネットワーク拡充活動を行った。

民主党新政権のもと発足した「新しい公共円卓会議」に提言する「新しい公共を考える市民キャビネット・災害支援部会」のシンポジウムに登壇。また、内閣府の「防災ボランティア活動の広域連携に関する調査・意見交換」に委員として参画し、これまでの経験から積極的に発言し重要な提言として受け止められている。加えて、静岡県で開催している「災害ボランティア養成講座」(年間6回)をはじめ全国各地で開催されている同種の講座で阪神・淡路大震災の経験と知見を伝えると共に、減災サイクルの必要性を訴え続けた。

ネットワーク事業については、「震災がつなぐ全国ネットワーク」をはじめ各種団体の委員としての参画やイベントへのバザー出展参加を通してネットワークの充実に努めた。

### 5. 広報活動

本誌「じゃりみち」の年2回発行やホームページでの活動報告更新などによって、会員間の連携と協働の充実に努めるとともに、被災地内外の関係団体、支援者への情報発信を行った。

## <2011年度事業計画>

### 1. 寺子屋事業

「減災サイクル」を1シリーズ開催予定。

### 2. まけないぞう事業

東日本大震災の被災者による「まけないぞう」作りを広げる。岩手県遠野市の拠点から通う大槌町、陸前高田市、釜石市、大船渡市では避難所から仮設住宅への移行も視野に入れて、山形県米沢市や栃木県鹿沼市、新潟県小千谷市では福島県から避難されてきた方々に作って頂く。タオルの募集、タオルの受入れ・仕分け、「まけないぞう」の宣伝・販売と支えあいの輪を一層広げていく。

「まけないぞう」が被災者の自立および生計支援として、再び復興過程のテーマになってきたといえる。

\* 販売目標 10,000頭(2010年度実績 1,245頭)

### 3. 災害救援事業

東日本大震災被災者支援活動について、昨年度に引き続き継続していく。山形県米沢市と岩手県遠野市にスタッフを派遣し、ボランティア拠点の運営サポートをすると共に、足湯やまけないぞうの活動を広める。

被災地での足湯ボランティアがマンツーマンで足湯をしながらつ集めたつぶやきは、6月時点で2,000を超え、地元の災害ボランティアセンターに提供されたが、「中越・KOBE足湯隊」で独自の分析・検討をして報告書を作る計画である。

神戸の事務局においても、「野菜サポーター」プロジェクトと、「アレルギー対応粉ミルクを届けよう」プロジェクトを継続して、その運営に当たる。

佐用町の復興支援としては、水害の遠因ともなった竹林の整備の一つとして竹炭づくりを継続。こうした同町の山林整備の活動は、毎日新聞社とコラボレーションする形で、国土交通省国土緑化推進機構の事業として応援を受けて進める。さらに、2011年度、2012年度の2年間トヨタ財団の支援を受け、「佐用町の山林整備を通して地域における学びの場、育ちの場を形成する人材育成プロジェクト」を展開する。

なお、東日本大震災支援事業については、CODE 海外災害援助市民センターよりスタッフの出向および資金面でのサポートを受ける。

### 4. 提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

今年は、東日本大震災の支援活動に関わるすべてが提言活動に繋がるといって過言ではないだろう。被災地が緊急救援時から復旧・復興時に移行し、避難所から仮設住宅(民間借上げ含む)に移動していく時々の支援を考えると、阪神・淡路大震災以降積み重ねてきた経験(失敗を含む)をもとに、出来る限りの提言をしていきたい。特に、暮らしの再建に欠かせない仕事づくりの取組みに力を入れる。

ネットワーク事業についても、「震災がつなぐ全国ネットワーク」、「東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク」、「日本財団」が連携するボランティア派遣事業「ROADプロジェクト」の一翼を担い、遠野まごころ寮の運営に関わる。また、「遠野まごころネット」にはアドバイザーボードとして関わり、東京大学支援ネットなど外部団体をつなぐ役割をも果たす。

### 5. 広報活動

昨年度同様に、会員間の連携と協働の充実に努めるとともに、被災地内外の関係団体、支援者への情報発信を行う。

## 東日本大震災 被災地支援 活動報告

3月11日に発生した東日本大震災により亡くなられたお一人おひとりのご冥福をお祈りすると共に、ご遺族の方々にはお悔やみを申し上げます。そして、被災された皆様、福島原発の事故により避難されている皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

被災地 NGO 協働センターは、震災で気づいた支えあい、学びあい、寄り添いという原点を大切に、1995年以来、様々な被災地の救援活動を行ってきました。この度の災害を受け、私どもはこの原点にそって、被災された方のいのちと暮らしに寄り添う支援を行っています。以下に、東日本での支援活動について、ご報告させていただきます。

### 【これまでの活動内容】

#### 1. 初動対応～拠点サポート

- ◆状況調査：地震当日の3月11日に先遣隊を派遣し、宮城・岩手・山形県等において状況調査を実施。
- ◆避難所・ボランティア拠点運営サポート：山形県米沢市(3月14日から現在まで)と、岩手県遠野市(3月25日より現在まで)にスタッフを派遣中。

※岩手県遠野市では、被害の大きかった大槌町などの沿岸部に対する民間の後方支援拠点として、市社協、青年会議所、地元 NGO・NPO 等が連携して「遠野被災地支援ボランティアネットワーク(通称：遠野まごころネット)」を立ち上げ、ボランティアや物資の受入れ、避難所・仮設住宅での暮らしの支援等を行っています。当団体は、立ち上げから現在の運営に至るまで同組織をサポートしています。

#### 2. 「足湯」ボランティア

たらいにお湯をはり、足を浸けてもらうことで心身共にリラックスしてもらう活動。冷えた体を温められるほか、ストレスや全身の疲れを軽減させる効果もあるとされます。阪神・淡路大震災のときに始められ、新潟県中越地震や能登半島沖地震などでも脚光を浴びました。

リラックスすると不安やニーズを口にされることがあり(これを「つぶやき」と呼んでいます)被災者の SOS の

サインを早めにキャッチしたり、暮らしの再建につながるニーズを代弁・提言することに努めています。山形県米沢市や岩手県沿岸部の被災地(大槌町、陸前高田市、釜石市、大船渡市ほか)などで実施。今後、仮設住宅での孤立を防ぐためにも足湯による寄り添いを続けていきます。



#### 3. 野菜サポーター

##### ～被災地から被災地へ、支援のリレー 第1段～

2011年1月の新燃岳噴火の被害を受けた宮崎の農家さんから野菜を購入し、東日本大震災の被災地での炊き出しや避難所での自炊、在宅避難者の食事材料などとして使っていただいています。宮崎の農家さんの収入につなげるとともに、避難所等で不足しがちである新鮮な野菜を提供。また、被災地(宮崎)から被災地(東日本)へ、「応援していますよ!」のメッセージを運び、被災地どうしの痛みの共有や励まし合いを目指しています。6月末までに、35ヶ所(岩手、宮城、福島、山形、千葉県内の各所)以上に約730便、箱数にすると5300箱以上を送付しました。



▲5月31日、被災された方々と宮崎の方々が一緒に、新燃岳の野菜で中華スープを作りました。(岩手県大槌町)

#### 4. アレルギー対応粉ミルク支援

アレルギー対応の粉ミルクを広く市民の方から募り、それを必要とする避難所や施設等に提供。7月末までに、18回に渡って合計1,200缶余りを、岩手、宮城、福島、山形、新潟県内の各所へ送付しました。

#### 5. 「まけないぞう」づくり

##### ～被災地から被災地へ、支援のリレー 第2弾～

3月末から各地の避難所で実施。もともと被災地KOBEの「生きがい・仕事づくり」として、阪神・淡路大震災当時の仮設住宅にお住まいの方のアイデアから生まれた活動で、ぞうの形をした壁掛けタオルを被災者がつくります。

詳しくは「ぞう通信」をご覧ください。

#### 6. 「竹炭を送ろう！」

##### ～被災地から被災地へ、支援のリレー 第3弾～

2009年の水害で被害を受けた兵庫県佐用町から「竹炭」を東日本に運ぶ取り組みを開始しました。佐用町水害のあと、私どもは「被災地に炭を！」を合い言葉に全国のみなさまに「炭」のご提供を呼びかけました。炭は脱臭・調湿に効果があると言われていいます。当時、全国60カ所から総計15トンをご提供いただき、浸水した家の床下に入れてい



▲公民館の床下に佐用の竹炭をまく村井代表（宮城県石巻市）＜時事通信提供＞

ただいたところ、たいへん喜ばれました。今度はそのお返しに、佐用町から東日本へ——。炭が応援のメッセージを運びます。

#### 【今後の活動】

##### 1. 仮設住宅における暮らしの支援

阪神・淡路大震災の後、仮設住宅、あるいはその後の復興住宅である高層マンションに移った被災者の中には、近所づきあいのない暮らしで孤立してしまう方もいました。今後、当団体は、仮設住宅で被災者が孤立しないよう、暮らしのサポートに重点をおいて活動してまいります。具体的には、上記「足湯ボランティア」の派遣とタオル手芸品「まけないぞう」づくりによって被災者の生活に寄り添っていきます。

また、もとのコミュニティがまとまって仮設住宅・復興住宅に入るだけでなく、現時点から先を見据えて仮設住宅内の住民自治を高め、安心して暮らせる環境をつくっておくことが不可欠です。こうした仕組み作りを促進するため、「震災がつなぐ全国ネットワーク」の分科会として誰でも参加できる「仮設支援連絡会」を立ち上げて連携しています。

##### 2. 福島の支援

さらに、福島の被災者の抱える問題がより長く深刻になってきます。福島の方は特に、原発事故のせいで家に帰る目途も立たず、もとの地域からバラバラに避難され、つながりを断ち切られています。こうした方々が孤立しないように、粉ミルクのニーズ収集や「まけないぞう」づくりを通してネットワークづくりを行ってまいります。

#### 事務局のひとこと。

自分も何かしたい——震災直後から、事務所にかかってくる電話のなかには「現地に行きたい」「物資を送りたい」「メッセージを届けてほしい」といった声があり、被災地に寄り添おうとしているたくさんのあたたかい心を感じてきました。Nさん(80代女性)も、素晴らしいボランティアをして下さっている方です。月1回くらい、10kmほど離れたご自宅から事務所までタクシーに乗って、抱えきれないほどのお菓子やパン、飲み物などを届けてくれます。初めは被災地への支援物資かと思いきや、「ボランティアのみんなで食べてね。私は後方支援の後方支援の後方支援だから、みんなを応援するの」と、ボランティアを支援するボランティアの役割に徹しておられるのです。お礼に手紙を送りたいと言っても、フルネームや住所は秘密。「また来るから」。この心遣いに私たちはどれだけ励まされてきたことでしょうか。被災地で直接何かをするわけではない、でも“今・ここ”で確かに被災地とつながっている、寄り添いの輪が広がっている……。そこでは多様な一人ひとりが、それぞれ大切な役割を持っていると実感します。

# ぞう通信。

第46号 2011.8.18



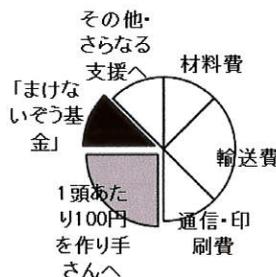
発行所: 被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10  
 TEL: 078-574-0701 FAX: 078-574-0702 http://www.pure.ne.jp/~ngc

この度はあたたかいご支援をいただき、誠にありがとうございます。  
 被災地 NGO 協働センターは、東日本大震災被災者の生きがい・仕事づくりのため、「まけないぞう」活動しております。みなさまのご支援のおかげで、東日本版の「まけないぞう」が誕生し、活動が広がっていておりますので、ここにご報告させていただきます。

## ■ 活動内容

3月27日、東日本大震災の被災地、岩手県大槌町で「まけないぞう」作りをスタートしました。その後、栃木県鹿沼市、山形県米沢市、そして岩手県陸前高田市など他の地域にも広がり、「仕事づくり」として、そして、作ることが被災された方にとってひとときの癒しの時間にもなっています。「まけないぞう」を作るのは被災者です。1頭400円で、そのうちづくり手さんには制作費として100円をお渡ししています。

また、手を動かしたり、人との関わりが生まれることによって、ともすれば希望を見失いがちなくらしに楽しさと潤いがもたらされます。そして、買った方からの「ありがとう」の声が生きがいにもつながります。売上の残り300円から材料費・送料の実費を除いた50円をプールし、「まけないぞう基金」としてさらなる被災地支援のために使わせていただきます。特に、暮らしの再建に欠かせない仕事づくりの取り組みに力を入れてまいります。今日に至るまで“まけないぞう”作りを支えて下さっているのは、KOBE、新潟、兵庫県佐用町の被災者、西播磨（兵庫県西部）の協力者です。被災地の避難所では、すぐに多くの“まけないぞう”をストックすることは困難だったため、軌道に乗るまで「つくり手応援団」として事業をサポートして下さっています。「KOBE・新潟の被災地から東日本の被災地へ」「まけないぞう」が支えあいの絆を結んでくれました。これまでに、兵庫県・新潟県のつくり手さんによるものを既に2700頭を全国に送り出しました。東日本でも7月に入って遂に完成品ができ始め、これまでに2000頭以上を送り出しました。(8/15集計)



## 「まけないぞう」作り手さんたちの声



▲岩手県大槌町、3月27日

「ずっと津波のことを考えていたけど、ぞうを作ることによって忘れることができた」「糸と針なんてもったことないのに…このぞうはうちの宝にします」「茨城にいる孫にあげるわ」



▲栃木県鹿沼市、4月16日

「わたしのぞうは耳が大きいなあ」「私のは鼻が曲がっているわ、性格が曲がっているからかな」「わたしのはずいぶん立派になってしまったわあ」



▲岩手県大槌町、6月7日

「キリンの首みたいに鼻が長いねえ～」「糸がほつれて鼻毛になってるよ!!(笑)あー笑いすぎてお腹が痛い」



▲岩手県陸前高田市、6月1日

「自分でつくったまけないぞうをボランティアさんや孫にあげたら、喜んでくれたよ」「仮設に移って落ち着いたら、またつくるよ」



▲岩手県大槌町、6月3日

「私のは顔がまがってるよ」「あ～ここへ来て初めてこんなまともにも頭動かしたわ～」「仮設住宅でもやりたい!!」

「お茶会などに誘われても一人じゃ行きにくいよ。でも、まけないぞうみたいにするのがあれば、お話ししながらできるから行きやすいね」

(福島からの避難者／5月26日、山形県米沢市の雇用促進住宅にて)

8人の大家族でまけないぞうを作りたいためIさん。「ボランティアさんや孫などにあげて、とても喜んでくれたよ」。ボランティアと撮った写真や取材を受けた写真をうれしそうに見せてくれました。

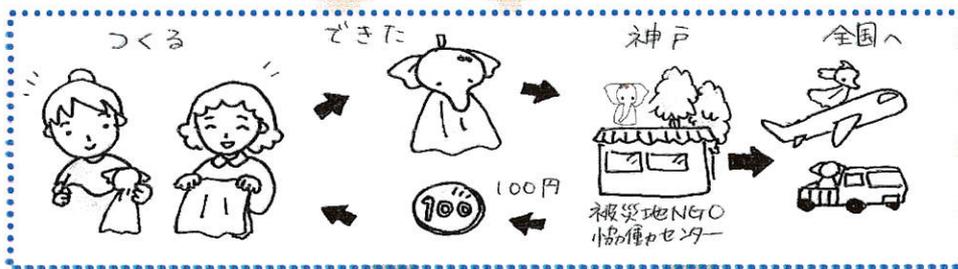
「仮設に移って落ち着いたらまけないぞうづくりを再開するよ。」

(6月1日、陸前高田市上和野会館にて)

「この度は、タオルぞうの作り方を教えていただきまして、ありがとうございました。お陰様で、楽しく手芸をすることができ、今では避難所生活での楽しみとなりました。お見舞いを頂いた方やお世話になったみなさんになんのお礼もできずに心苦しく思っておりましたが、このタオルぞうをお礼の品と差し上げられるようになり、とてもうれしいです。本当にありがとうございました。可愛く仕上がったタオルぞうを見てくださいます。」

～ 作り方チェックのため再度訪れた避難所で、都合により出席できなかった方からの手紙 ～

(6月14日、旧釜石第一中学校にて)



### ■ “一本のタオル運動”

「まけないぞう」の材料となるタオルを募集しています。

どなたでも、タオル一本から被災地支援ができます。

家庭や職場などにある新品のタオルを提供して下さい。

新品のみ下記の宛先にお送り下さい。

色柄は問いません。広告は片端のみOKです。

また、各地への材料輸送等のために、タオル1枚につき10円

のカンパにもご協力をお願いしております。

併せてよろしく申し上げます。

#### <新品タオルの送付先>

〒651-2271 神戸市西区高塚台4-3-1

Chimei-Innolux, TPO ディスプレイズジャパン株式会社気付

被災地 NGO 協働センター 宛

※ 同社はボランティアでスペース提供とタオル仕分けにご協力下さっています。

### ■ 「まけないぞう」のお求め・お問い合わせ

ご注文は、当団体までお気軽にご連絡下さい。

また、お買い求め下さった方の声も集めています

(メール、お手紙、電話大歓迎です！)

● TEL・FAX またはメールで、以下の内容をご連絡下さい。

①お名前 ②送り先 ③電話番号 ④お求めの個数

1頭400円です。お届け時に振込用紙を同封致します。

● 9頭までのお買上げの場合は送料をご負担願います。

● 10頭以上の場合は当方負担です。

#### <お求め・問い合わせ先>

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

被災地 NGO 協働センター 宛

TEL : 078 - 574 - 0701 FAX : 078 - 574 - 0702

Email : ngo@pure.ne.jp

URL http://www.pure.ne.jp/~ngo/

編集後記：小生は、まけないぞうである。ぞう通信を今回担当した、西村溪太の言葉を紹介する。

「被災地 NGO 協働センターに入って二週間足らずで、任されるとは思いませんでした。タイトルのぞう通信のロゴが無かったので、過去のぞう通信からコピーして、更に日付の所を変えなければいけないので、これまた過去のぞう通信から数字を切り張りして作り、てんやわんやでした。ロゴ、不自然な所は無いですでしょうか？」とのことだ。

ちなみにこのページに、小生は、小生自身を含め10頭いる。暇ならば探すといいたろう。

被災地 NGO 協働センターです。

この度は、2011年3月11日に発生した東日本大震災以降に、当団体が行う被災地支援事業の「まけないぞう」、「野菜サポーター」にご賛同くださった方々を対象として、広報誌「じゃりみち」を配送する運びとなりました。

被災地には未だ明日の見えない生活を余儀なくされている被災者の方々が大勢いますが、しかし震災発生直後のように大々的にメディアで取り上げられ、現地の情報が伝わってくることも少なくなりました。

皆様に被災地の情報をお知らせしたいという思いと、皆様のご協力があったからこそこれまで現地の支援を続けてこられたという感謝の思いがございます。そこで、まけないぞう購入や野菜サポーターという形で支援事業に携わってくださった皆様に事業報告の意味を兼ねて、じゃりみちをお届けしております。

誠に勝手ながら、東日本大震災による被災地の支援事業はこれからも続きますので、引き続き皆様にじゃりみちを配布する予定がございます。

購読の停止をご希望の方は、お手数ですが、下記の電話またはメール、FAXにてその旨をご連絡ください。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

被災地 NGO 協働センター

〒652-0801

兵庫県神戸市兵庫区中道通 2-1-10

HP <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>

TEL 078-574-0701 / FAX 078-574-0702

e-mail [ngo@pure.ne.jp](mailto:ngo@pure.ne.jp)